【翻訳】

ウイドブロへの手紙　ほか六篇

ゴンサロ・ロハス[1]
三角明子訳

ウイドブロ[2]への手紙

1

二十一世紀はほぼあてにしていない、とにかくなにか起きるだろうし、
ひとはまた死ぬだろう、だれも知らない
だれかが生まれ、敏捷さをつかさどる物質に関する
あらたな物理学によって
大地の磁力は予見のなかで目が勝ち取るはずの運に近づくだろう、そ
　して旅そのものは
精神の飛翔になるだろう、駅はなく、たとえば夏の鍵を
ひらくだけでわたしたちは
太陽のもとで泳げるだろう、娘たちは
銀河の恩寵のおかげで九カ月のあいだ、さらに分娩後の
九カ月も、**世界**よりも前からあった
カラマツの成長のめぐみを受け
非常に美しくありつづけるだろう、そうして
揺らされた波がまた別の期間風をはらんで
躍るだろう。もうひとつのさらに爽快な血のリズム、コントラダンス
　によって一撃で
ひとはおのれの大地(フムス)に入り、さらに
謙虚に、さらに
地のものになるだろう。

2

ああ、兆しもないがもうひとつ、すこしずつ**現実**の
機構は古びるだろう、ドラッグも
みじめな映画もなく、時代錯誤の新聞

――放埒と馬鹿騒ぎ――も恥ずべき拍手をする商人たちも、こんなも
のはすべて
創造の掛け金(きん)で
古びることだろう、目は
ふたたび目になるだろう、触覚は
触覚に、永遠の
エーテルたる鼻は絶えず発見をくりかえし、交接は
わたしたちを自由にし、ダリーオ[3]が
言ったように英語で考えるようにはならず、ふたたび
ギリシア人の書物を読み、世界中の岸辺で
エトルリア語をまた話すようになり、三十年も過ぎ
大陸が合一すれば、
トルコ石色の蝶の魅惑をまとって南極が
わたしたちのなかに入り、その下を通って
七本の列車が未知の速度でさまざまな方角へ進むだろう。

3

わたしたちがみるかぎりイエスは
予定された日には来ないだろう、アルミの
鳥が見えない飛行機にとってかわり、二十世紀の
終わりにはもう瞬時性が優位を占めるだろう、わたしたちは転換を
見届けることにはならず、有限の生を
与えてくれた母とともに先祖として
塵のなかで眠るだろう、そしてそこから
持続し太陽を止め、
突然の存在となる――神族のように――企てを言祝ぐだろう。

一九九三年三月、南極圏
ビリャ・ラス・エストレーリャスにて記す

Carta a Huidobro

パブロ・デ・ロッカ[4]

あんなに強靭なひとは現れないだろう、未来永劫
わたしたちに道具をくれたあの雄々しい爺さんにくらべうる
ひとは現れないだろう、あの明哲な
激情抜きに火山は歩かない、かずかずの大河も
ターコイズの水をたたえ驚嘆すべき大きさまで育つことはない、あんな
屈託のない創造に
だれひとりたどりつくことはできなかったろう、
危険をおまえ呼ばわりするなんて。かれ以外
だれひとり、非在の神の稲妻に
撃たれたものはなく、かれの度胸のほかに
身震いするような予言に接舷し、かつて

目にもふれず耳に届かなかった、はかりしれない
一九五八年の**傷**を予兆の
むごさそのままに燃え盛る
溶岩としてわたしたちに吹きこみはしなかった、**暗殺された**
共和国、あの黒い表紙の
ノートをかれみずからが
道みちしわがれ声で売り歩いた
塵の埃くささを縫って、幻影が跋扈する夜に、四頭の痩せ馬に
ひかせた古い馬車のおんぼろに乗った御者のように行き来した。だれ
も、
そうだだれも、かれの前にも後にも、だれひとり
こんなふうにまるごとな死すべき定めのものは、こんなに
強靭で男、暴力的なわれらが父のような不可欠の
むすぼれは！

ひとはロッカ者として生まれる、酩酊とみずみずしさを備え
ロッカ者に生まれる、甲高い声はあげず、石と威厳を
想いロッカ者に生まれつく。あの日和見の
貧しさ
すべての貧しさの筆頭の
貧しさを食みながら、この世を
泳ぎ、女を
芽吹かせ、男と
男で無言で話し、この世界の
音節として
唯一の軌道に隔てられた、泉。デ・ロッカは
泉だった。

二十二年に『呻き[5]』が産声をあげてからずっと、みんなの
原子となった、同じ年には
もうひとりの打ちのめされた者バリェホ[6]が
『トゥリルセ』を称賛からは遠い言葉に
移しかえた、バリャドリード通り一〇六番[7]の通夜に至るまで、やり過ぎ
対中傷。かれを糧に

わたしたちは生きているのだ！　このことの写真がありませんように。
死者に
関するたわごとも。自死したなら
自死したでいい、Sic transit gloria mundi[8]などおよびじゃない、
モルタデラソーセージやらなにやらと一緒だ。かれは栄光を愛しはし
なかった。
かれの頭脳の神話は散乱し
床を覆った。愚か者が口にするスペイン語まじりのラテン語、
In propia venit et sui eum non receperunt. かれは自宅に戻ってき
たが
家の者はかれを迎え入れなかった。

*Mardito または amarditao はわたしの郷里のことばで maldito（「呪われた」）の意味で使う。ヴェルレーヌが使ったような意味ではなく、おのれの迷宮のなかで爆発的なアルコールそのものにとりつかれた者のことである。

Pablo de Rokha

ネフタリ[9]と呼ばれた男

わたしたちのために宿命とことばを交わしていた唯一の男は行ってし
まった
魅惑者の
魅惑から堕ちた。さて、かれの
青い靴の**世界**に瞠目せよ、かれのインクの
舌となれ。
水をたたえたかずかずの壜よ、
名声と幸運を冷やせ、清涼を
セメントに。

死者のための祈りの味気なさ。わかっていないからなのだ。ネルーダはその天与の才と熟達をはるかに超えて、ガブリエラ[10]やウイドブロ、あるいはもうひとりの、もうひとりのパブロ[11]と同じく、われわれの呼気だったと考える者がいる。そしてそれは、このかれのもたらす大気がかつて自然な分裂に気づかせてくれなかったからいうわけではない。だがわたしたちは世界を見、においをかぎ、聞くことをかれのことばから学んだ。かれのことばにうちひしがれ、心を奪われて。復活を待ち柩を安置する穴は重要ではない。

Llamado Neftalí

ウンベルト[12]への献花

この十一月に落ちたうちウンベルトの柩が
もっともしわがれた声をしていた。その作業は
一瞬で終わった、と天幕ナンバー
四か五の下で声がした。「最後の予言者の
ひとりを埋葬
してるとこだ」とひとりが言った。もうひとりは
グラジオラスの向こうから「ひとは死ぬのではなく
魔法にかかるのだ[13]」と。そのなかに
手つかずのかれの肌が
だれのものでもない枠に
はまっていた。白血病と
輝きの八十五歳、息詰まるほどの薔薇のした
ガラスの柩の
お披露目だ。架空の

儀式を閉じるには好ましくない
数だ、大理石
すれすれを飛ぶ鳩たちのクークーという声も
好ましくない、葬儀ビジネスには
そぐわない
緑に塗り立てられた芝生、ひどい
はかない見せ物だ。

Flores para Humberto

かつて偶運はホルヘ・カセレス[14]と名乗った

かつて偶運はホルヘ・カセレスと名乗った
そして大地を二十五年さまよった
聡い双眸、くらいまなざし
速い二本の足、そして智慧の持ち主
だがあまりに遠く、あまりに気ままに遠くまで歩いたので
だれひとりかれの顔を見なかった。

火山でもありえた、だがホルヘ・カセレスになった
この生きた溶岩
この急ぎ足この恩寵、このすばらしい炎、
みじかい日々のあいだ静脈を走りぬけた
この至純の動物は。そして静脈は呼吸困難の
オアシスにたどりつくと
一瞬で心臓を出入りしたのだ。

いまは光と速度につつまれ
かれの魂はみどりごたちの
耳元でうなる蠅になった。

「どうして泣くの？　生きなさい。
じぶんの酸素を深く吸うんだよ」

Una vez el azar se llamó Jorge Cáceres

テイリエル[15]との契約

1

あの偉大な郷愁者は死ぬほどの渇きをもって生まれ
ついぞ満たされなかった、
死を迎えてもなお満たされず、月曜日に
バルパライソの斜面を落ちていきながらも
やはり満たされなかった

遺された最後のカラマツのなかにあっても終わりまで
飲んだくれ魔術的で――わたしも
カラマツだ、自分がなにを言っているのかはわかってる！　われらが
ホルヘ・テイリエルは、つまり死んだのだ。

2

そしてかれ抜きで世を漂うわたしはだれにも伴われずここにいる、人
　　ごみにまみれた
プエルタ・デル・ソル[16]の無人の
メリーゴーラウンドに。さまようがために
さまよい、歩きながら男らしく涙を
流さずに泣いて――アラウカノの
くるしみを奥底に――マドリッドの噂場まで
三歩のアレナル通りをたどり
敗者の苦難の
いくばくかを知りさらに
栄光につつまれ燃えあがった髄のなにか、
なにかを知っていたケベード[17]のあとをたどった。

3

ああ、恋する塵[18]よ、いまごろこの狂人は
おのれの子ども時代にもひとしかった
アルコールの永遠に入ったことだろう。もう一度
繁殖と出現によって
王となった王土ラウタロのしのつく雨に濡れて
子羊の血を飲んだことだろう。もうリン[19]は
杯を酒で満たし、エセーニン[20]は
おのれ自身の高い扉を
偉大なる辛辣家に
開けてやったことだろう。おたがいしかるべきときに署名しそこねた
契約書をわたしはここに置く。イサドラの
舞踊をかれに遺す、あのキス、
不在のマファルダ[21]の爽快な笑い声を、
世界を
ぶら下げた
瞬間的なるものの
姿を。

リン抜きで

Pacto con Teillier

リンはリンのことを話すには血を流しすぎて
もう去ったリン、〔Defunctus adhuc loquitur〕[22]、肉体は

姿なきものより好ましく、埋葬の
ことも埋葬の腐敗のたとえ話も問題ではない。かれとわたし
以外にはないなにか、
　　おのおの
非現実の
もう一本のシュプレー川の下を行く
Uバーンに乗り
　　各自の柩は
その外皮に、
　　だれでもないひとりひとりは
おのれのだれでもなさのなかで、油を抜かれ
わたしはベルリンの鴎の
金切り声のなかを行くように
彼岸も
此岸もない、ただ南には
西へ向ういたって悲しい
アドリアナ[23]、霧雨につつまれる
アンドレア[24]、それが
すべてを
裏付ける。
――さて、リンが
話す番になった。

壁

また壁。

Sin Lihn

訳注

（1）チリの詩人ゴンサロ・ロハス ROJAS, Gonzalo（1916-2011）が同時代を生きたチリの詩人たちに寄せて書いた詩を集めた。底本として *Íntegra.* Edición de Fabienne Bradu. México: Fondo de Cultura Económica, 2013. を用いた。

（2）ビセンテ・ウイドブロ HUIDOBRO, Vicente（1983-1948）チリの詩人、作家。

（3）ルベン・ダリオ DARÍO, Rubén（1867-1916）ニカラグアの詩人。ラテンアメリカから生まれた初の文学運動として知られるモデルニスモ Modernismo の提唱者で、同時代のスペイン文学にも大きな影響を与えた。ここでは、ダリオの代表作「白鳥たち」"Los cisnes" の一節 "¿Tantos millones de hombres hablaremos inglés?"「われわれ何百万ものひとびとが英語を話すことになるのか？」に言及している。

（4）チリの詩人パブロ・デ・ロッカ DE ROKHA, Pablo（1894-1968）。

（5）*Los gemidos.* Santiago de Chile: Editorial Cóndor, 1922.

（6）ペルーの詩人セサル・バリェホ VALLEJO, César（1892-1938）。『トゥリルセ』*Trilce.* Lima: Talleres de la Penitenciaría, 1922. はスペイン語で書かれた前衛詩を代表する詩集のひとつである。

（7）デ・ロッカが晩年に暮らした家の所在地。チリの首都サンティアゴにある。

（8）ラテン語の格言「かくして世の栄光は過ぎゆく」。

（9）チリの詩人パブロ・ネルーダ NERUDA, Pablo（1904-1973）、本名リカルド・エリエセル・ネフタリ・レジェス・バソアルト REYES BASOALTO, Ricardo Eliezer Neftalí をさす。一九七一年にノーベル文学賞を受賞した。

(10) チリの詩人ガブリエラ・ミストラル MISTRAL, Gabriela（1889–1957）をさす。一九四五年、ノーベル文学賞を受賞した。
(11) 前出のパブロ・デ・ロッカをさす。
(12) チリの詩人ウンベルト・ディアス・カサヌエバ DÍAZ-CASANUEVA, Humberto（1906–1992）。
(13) ブラジルの詩人ジョアン・ギマランイス・ローザ GUIMARÃES ROSA, João（1908–1967）のことば "As pessoas não morrem, ficam encantadas" のスペイン語訳。
(14) チリの詩人ホルヘ・ルイス・カセレス CÁCERES, Jorge Luis（1923–1949）。ロハスが若いころに接近したチリのシュルレアリスト運動グループ、マンドラゴラ Mandrágora のメンバーのひとり。ダンサーとしても活動した。
(15) チリの詩人ホルヘ・テイリエル TEILLIER, Jorge（1935–1996）。
(16) プエルタ・デル・ソル Puerta del Sol はスペインの首都マドリッドの中心部に位置する広場。後出のアレナル通り Calle del Arenal はこの広場につながる通りのひとつ。
(17) スペインの詩人フランシスコ・デ・ケベード QUEVEDO, Francisco de（1580–1645）。
(18) 前出のケベードの詩「愛の彼方の変わることなき死」"Amor constante más allá de la muerte" の一節から。
(19) チリの詩人エンリケ・リン LIHN, Enrique（1929–1988）。
(20) ロシアの詩人セルゲイ・エセーニン YESENIN, Sergei Alexandrovich（1895–1925）。テイリエルはエセーニンの作品のスペイン語訳者であり、エセーニンの作品世界についてのエッセイも記した。
(21) アルゼンチンの漫画家キノ Kino の作品『マファルダ』の主人公の少女。
(22) 「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」（『新約聖書』「ヘブル人への手紙」第十一章四節より。
(23) リンの晩年のパートナーであったアドリアナ・バルデスをさす。
(24) リンの一人娘アンドレア・リンをさす。